

TOKYO人権

特集 01 人と人とを隔てる深い川に
橋をかけたい 村崎太郎

特集 02 歩く人と見物する人みんなを元気づける、
性的少数者のパレード

vol. **47** 2010.09

財団法人 東京都人権啓発センター

特集 01

TOKYO人権

人と人とを隔てる深い川に橋をかけたい

“反省猿”の次郎とコンビを組み、一躍お茶の間の人気者となった村崎太郎さんは、二年前、妻である栗原美和子さんが書いた私小説『太郎が恋をする頃までには…』の中で、被差別部落出身であることを公表しました。同和タブー視の問題に正面から切り込み、世間の無関心と戦い続ける村崎さんに、カミングアウトの理由や、その後の変化などについて、お話をうかがいました。



村崎 太郎さん

自分の出自を誇るために 猿まわし芸を受け継いだ

**被差別部落出身であることを
公表したのはどうしてですか？**

「わたしは被差別部落出身です」

そのことだけをきれいに覆い隠して、長い間猿まわし芸をやってきました。でも、自分の出自を語らないまま、この芸を続けていくことが、どうしてもできなくなってしまったんです。

わたしが猿まわし師になった理由は「猿と一緒にかわいらしい芸がしたかった」からでも「有名人になりたかった」からでもなく、わたし自身が被差別部落出身であることと、深く結びついていました。

猿まわしは被差別部落の人々が受け継いできた日本の伝統芸能で、1,000年以上の歴史を持っています。明治以降この芸が各地で途絶えるなか、それが最後まで残ったのがわたしの故郷でした。ところが、芸人をとりまとめたわたしの曾祖父が廃業したことがきっかけで、細々と続けていた芸人も一人減り、二人減り…そして完全に消滅してしまいました。しかし1970年代に、「部落の誇る文化を復活させよう」とわたしの父が尽力しました。わたしはその思いに応え、復活第一号の猿まわし師になったのです。

猿まわしに対して最初はなんとなく「カッコ悪

い」というイメージを持っていました。それに被差別部落出身だということを知られて蔑まれるかもしれないという不安もありました。けれど、そういう否定的なイメージは自分が人気者になることで塗り替えていけばいい、そう思い直したのです。誇りを持ってこの道へ進もう——そう心に決めました。

だから、わたしの半生をテレビドラマにしたいと言って、後に妻となる栗原美和子が訪ねてきたとき、本当はこの話も入れて作って欲しかった。けれど結局、その時は言い出すことができず、「猿とお兄さんが東京へ出てきて頑張った末、芸術祭賞を取った」というどこにでもありそうなきれいで無難な話になってしまいました。

誇りを持って猿まわし芸の再興を目指し、努力してきたはずなのに、なぜそんな肝心なことを隠したまま、ここまでできてしまったのだろうか？ そんな自問を繰り返した末、たどりついた結論が、「もう嘘で塗り固めた人生はイヤだ!」という強い思いだったのです。



カミングアウトに対する 世間の反応はどうでしたか？

結婚後、2008年に妻が書いた私小説『太郎が恋をする頃までには…』が出版されたとき、世の中からの反応はほとんどありませんでした。どの新聞も雑誌も「そのこと」を扱っている本は、

うちではちょっと…」と言って書評を掲載してくれなかったのです。新聞や雑誌でさえそうなのですから、テレビやラジオなどの放送番組ではなおさらです。

なにか特別な反応をしてほしいわけではなかった。そうではなく、「太郎さん、どうしてカミングアウトしたの?」と、ごく普通にみなさんが尋ねてくれることを、わたしは期待していたんです。

ところが、妻の著書は危険視され、わたしは企業イベントなど、ビジネスに関係する催しには、一切呼ばれなくなってしまいました。こうしてあまりにも無反応を装う世間を目の当たりにして、同和問題に対するタブー視の強さを、あらためて思い知らされることになったのです。

それでもわたしはあきらめず、2009年4月に『ボロを着た王子様』という本を書き上げました。四十年以上も封印してきた生い立ちを、今度は自分自身の言葉で綴った自叙伝です。

ところが、肉親の反対を押し切ってまで出版にこぎつけたものの、世間に広がるタブー感を打ち破ることはできませんでした。それで、わたしは、もうどうしたらいいか、自分でもわからなくなってしまったんです…。

真剣に向き合うことで初めて 大事なことが見えてくる



その後、日本全国をめぐる旅に出たそうですね。

仕事の依頼も途絶え、悶々としていたある日、本当はみんなどう思っているんだろう? だったら、いろんな人と触れ合って直接話をしてみよう。そうすれば、何かが見えてくるんじゃないか、と思いたちました。そして、わたしは次郎とともに旅に出ることにしたんです。

まず最初に訪れたのは、都市部にあるいわゆる限界集落（65歳以上の高齢者が人口の50%以上を占める地域）でした。いつものように芸を披露し、自分の出自のことを語ってみる。そうしたら、いろんな人がいろんなことをごく普通に話せる場がそこにできたんです。その

ときに「みんなで笑ったのは久しぶりだ」とつぶやいたお年寄りのことばがとても印象的でした。彼らが本当に欲しているのは、お金や支援じゃなく、そういう人と人との温かい触れ合いだったんですね。それはインターネットや本を読むだけでは決してわからなかったことです。

その後、全国の寒村、ハンセン病療養所、児童養護施設、幼稚園や老人ホームなどを訪ね歩き、さらに被爆者の方々や水俣病の患者さんたちにもお会いしました。

こうして旅を重ねるにつれて、わたし自身「何も知らなかった」ことに気づかされました。自分の狭い世界の中で、勝手に知ったつもりになっていたけれど、肝心なことは何もわかっていなかった。見ない、触れない、コミュニケーションしない、相手と向き合わないのでは、本当のことはなにも見えてこないんです。

同じことは、猿まわし芸にも言えるんですよ。わたしは次郎が芸をしないときは、お客さんの前でも厳しく叱ります。すると、その瞬間だけを見て「ひどい!」と言う人がいる。わたしは猿の優れた面をたくさん知っていますし、なにより猿を愛し、尊敬しています。そうでなければ猿まわし芸はできません。それに犬や猫など家畜化された動物とは違って、ニホンザルは野生動物ですから、芸ができるように調教するには、相当な覚悟が必要なんです。また彼らが人間から嫌われずに共存していくためには、芸を身につけることは一つの大きな手段でもあると考えています。物事の表面だけを見て判断する人は、猿を「かわいい、かわいい」と言いながら、じつは、人間よりも下等な動物だと見下してはいないでしょうか?

いまの日本の社会は、みんなが敵対し合っているように見えます。本当の相手に触れようとせず、遠く離れたところから相手を記号のように単純化し、排除する。「あの人たちはこうだから」と決めつけてしまうと、わからないことへの恐怖感がいっそう増していく。これが差別を生み出す図式なのだと思います。

もっと普通に 自由に語り合えるように



差別の問題にどうやって向き合っていけばよいのでしょうか？

被差別部落の出身者は全国におよそ300万人もいるといわれていますが、こんなにたくさんの人たちが自分の出自を隠さなければならぬのだとしたら、この問題の深刻さがわかるでしょう。幸い、現在は昔のような厳しい差別があるわけではありません。だとしたら、本当はもっと普通に話せてもいいはずですよ。それなのに実際はそうじゃない。みんな知っているのにだれも触れたがらない。差別が陰で息を潜めている、そういう陰湿なこの社会の行く末が心配だったことも、わたしがカミングアウトに踏み切った理由の一つでした。

強い決意を胸に、志をもっておこなったことだったけど…今でもたった一つ気がかりなことがあります。それは、最初の結婚相手との間に生まれた三人の子どもたちのことです。わたしのカミングアウトによって、突然「部落の血を引く子ども」になってしまったことに彼らは戸惑っているに違いありません。そしていまでは彼らとの連絡も途絶えがちになっています。自分の子どもだからこそ、力強く自分の人生を切り開いていってほしい、そう願っています。

愛しい子どもたちのことを第一に考えたら、カミングアウトなんかとてもできなかった。だからわたしは、いまでも申し訳ない気持ちでいっぱいです。つくづく身勝手な父親だと思っています。そうやって、自分だけの問題では済まないだけに、つらいし、怖いんです。しかし、だれかが真正面から切り込まないと、いつまでたっても解決に向かわない。そう思ったから、カミングアウトに踏み切りました。日本中が「人権問題」というなにか抽象的なことにして見て見ぬ振りをしているんです。

よく聞く「差別してはいけません」といういかにも立派なご意見は、わたしには“上から目線”としか思えません。そんなふうに差別問題を他人事のように語る大人に育てられた子ども

たちがまた大人になって、いまの日本をこんな殺伐とした国にしてしまったのです。このことに、みんなで向き合う時期が来ているのではないのでしょうか。

そして、心に傷を負っているすべての人たちにぜひ呼びかけたいのは「勇気を出して心の扉を開いてみませんか？」ということ。自分も最初はそんなこと絶対にできないと思っていたから、簡単じゃないのはわかっています。でも、思い切って自分のことを語れば、きっと相手も心を開いてくれる。それがどんどん連鎖して行って…。「わたしは被差別部落出身です」と言いたい人は言える。それに対して、周りの人も自由に発言し、語り合えるようになる。そんな風通しの良い世の中になったらいいなあ。わたしはそんな、人と人との間に「橋をかける」活動をこれからも続けていきたいと思っています。

文 山川英次郎



TOKYO人権

村崎 太郎さん PROFILE

1961年、山口県生まれ。17歳でニホンザルの次郎(初代)とコンビを結成し、途絶えた猿まわし芸を復活、次郎の“反省”ポーズで全国的な人気者になる。91年、「文化庁芸術祭賞」受賞。92年にはアメリカ連邦議会から「日本伝統芸」の称号が授与された。2007年7月、テレビ番組プロデューサーの栗原美和子氏と結婚。翌08年、被差別部落出身であることを公表。ここ数年は、日本各地の農家や漁村、限界集落、ハンセン病療養所や原爆の被爆者を訪ね、ともに語り合う「出会いの旅」を続けている。近著に『ボロを着た王子様』、妻・栗原氏との共著に『橋はかかる』(ともにポプラ社刊)。



村崎太郎+栗原美和子 著

橋はかかる

ポプラ社 刊

定価 1,365円(税込)

被差別部落出身であることを公表した村崎太郎。ごく一般的な家庭に育った栗原美和子。悪戦苦闘の3年間、少しずつみえてきた希望の橋。今、すべての人に贈りたい、胸が熱くなる勇気と感動の本!

information 01

平成22年度人権問題都民講座

みんなで楽しむ手話落語

— 講演と手話落語の会 (口話付き) —

日時 平成22年10月29日(金)
午後7:00～8:45 (開場は午後6:30)

会場 豊島区民センター (コア・いけぶくろ) 6階
文化ホール 東池袋1-20-10 (池袋駅 東口)

講師 古今亭菊千代さん

参加費 500円 当日受付にてお支払いください

手話通訳
あり



古今亭菊千代さん

1984年古今亭円菊門下に入門。
93年三遊亭歌る多さんとともに女流
初の真打に昇進。浅草演芸ホール・
鈴木演芸場・新宿末広亭などの定
席をこなしつつ、篤志面接委員とし
て全国の矯正施設を飛び回る日々。

お問い合わせ・お申し込み

TEL 03-3876-5372 FAX 03-3874-8346

E-mail info@tokyo-jinken.or.jp

FAXまたはメールでお申し込みの場合は、件名に「手話落語申
し込み」と明記のうえ、お名前・ご連絡先 (FAX・メール等)・参
加人数をご記入ください。

information 02

人権問題研修講師出講事業のご案内 経験豊富で、時代感覚を備えた講師が出講いたします。

研修内容 「基本的人権」「セクシュアル・ハラスメントの防止」
「同和問題」など、さまざまな人権問題に対応します。

研修時間 3時間を原則としますが、1時間単位でも受け付けます。

料金 1時間15,750円 (消費税込み)

お問い合わせ・お申し込み

(財) 東京都人権啓発センター 普及情報課
TEL 03-3876-5372 FAX 03-3874-8346
E-mail kenshu@tokyo-jinken.or.jp

information 03

東京都人権プラザ 展示室

こころのこえを詩にのせて

詩は言葉のちからを最大限に引き出す芸術です。人権の視点で選んだ現代詩作品
のアンソロジーをお楽しみください。

会期 平成22年9月30日(木)まで 土日祝も開館しています。
9:00～17:00

会場 東京都人権プラザ 展示室 (台東区橋場1-1-6)

お問い合わせ
TEL 03-3876-2963 <http://www.tokyo-jinken.or.jp>

入場
無料

information 05

～ひとりで悩まないで
もっとあなたの声を聴かせてください～
東京都では、さまざまな機関が連携・協力して、
自殺予防に取り組んでいます。



相談窓口	電話番号	受付
東京都自殺相談ダイヤル ～こころといのちのほっとライン～	0570-087478	14時～21時30分
東京いのちの電話	03-3264-4343	24時間
自殺予防いのちの電話	☎0120-738-556	毎月10日のみ 24時間
東京多摩いのちの電話	042-327-4343	10時～21時 第3金・土は24時間
東京自殺防止センター	03-5286-9090	20時～翌朝6時 火曜日のみ17時～翌朝6時
東京都夜間こころの電話相談	03-5155-5028	17時～21時30分
心の病や悩みに関する相談	保健所や区市町村の精神保健相談窓口で 受け付けています。	
東京都生活再生相談窓口 (多重債務者生活再生事業)	03-5565-1195	9時30分～18時 月～金
TOKYO チャレンジネット (住居喪失不安定就労者サポート事業)	☎0120-874-225	10時～17時(月・水・金・土) 10時～20時(火・木)

お問い合わせ

東京都福祉保健局 保健政策課
TEL 03-5320-4310

<http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/iryo/tokyokaigi/index.html>

information 04

9月は障害者雇用支援月間です。

シンポジウム「東京の障害者就労を考える」

日時 平成22年9月10日(金) 14:00～17:00

会場 東京しごとセンター地下講堂 (JR飯田橋駅東口 徒歩7分)
※当日、1階で障害者の方が製造した
パンの販売があります (11:30～13:00)

定員 100人 (事前申込・先着順)

お問い合わせ・お申し込み
(財) 東京しごと財団 障害者就業支援課 企画普及係
TEL 03-3202-7285 FAX 03-3202-7649
http://www.shigotozaidan.jp/shkn/html_f/jyoho_new.html

information 06

東京都人権啓発センター賛助会員募集のご案内

●団体賛助会員 一口 30,000円 ●個人賛助会員 一口 2,000円 (ともに会員期間は4月1日から3月31日までの1年間です)

特典 ・「TOKYO人権」や行事の事前案内などをお送りします。
・「TOKYO人権」やセンターのホームページに団体会員名を掲載いたします。

お問い合わせ (財) 東京都人権啓発センター 総務課
TEL 03-3876-5371

団体
会員の
皆様

(社)板橋区シルバー人材センター
荏原ユーザライト(株)
(学)高宮学園
(有)東京エイドセンター

東京都人権啓発企業連絡会
(財)東京都中小企業振興公社
(社)東京環境保全協会
(有)関東紙業

(財)住宅管理協会関東支部
東京都下水道サービス(株)
(財)東京都交通局協力会
東京電力(株)

(株)コミュニチュア
(財)東京都弘済会
東京地下鉄(株)
東京都住宅供給公社

(株)日本アクセス
(株)プランニング・ヴィ
(順不同)

歩く人と見物する人みんなを元気づける、性的少数者のパレード

性的少数者のお祭りとして知られる『東京プライドパレード』がさる8月14日、2年ぶりに開催されました。この日、イベント会場となった代々木公園と、パレードが実施された渋谷から表参道にかけての通りは、多様性をあらわす性的少数者のシンボルである虹色^{にじいろ}をモチーフとした旗で彩られました。性的少数者それぞれがかかえるさまざまな問題、パレードの目的など、主催団体に取材しました。



すな かわ ひで き
砂川秀樹さん
東京プライド代表
文化人類学者
東京大学非常勤講師

性的少数者のパレードのはじまり

性的少数者のパレードは、アメリカ合衆国のニューヨーク市で1970年におこなわれたのが最初で、現在では世界各地で同様の催しが多数開かれるようになりました。中でも特に有名で大規模なものはオーストラリアで毎年2月におこなわれている「シドニー・ゲイ&レスビアン・マルディ・グラ」で、海外からの観光客も多く訪れるためその経済効果は大きく、オーストラリア政府も全面的にバックアップしています。

日本では、1994年に東京で初めてのパレードが開催されました。このときの主催団体のもとで数回おこなわれた後しばらく中断していましたが、この間、札幌でも同様のものがおこなわれるようになり、東京では2000年になって現在の主催団体による新体制で再び開催されるようになり、現在に至っています。

「公的な援助が特にあるわけではありません。スタッフはボランティアベースですし、パレードのガイドブックに掲載する広告費が主な収入源。継続するのはとて

も大変です」(東京プライド代表 砂川秀樹さん)。

途中、何回かの一時休止を経て今夏(2010年)開催された第7回のプライドパレードには、およそ5,000人(隊列2,300人、沿道からの応援700人、代々木公園イベントの参加1,500人、その他ボランティアスタッフ等も含む)の人たちが参加しました。これは、東京でおこなわれる組織動員の無い個人参加によるデモンストレーションとしては、最大規模のもののだといえます。

どこにでも一定数存在する性的少数者

人間の性は必ずしも単純明快に男女に二分されるものではなく、非常に複雑で多様であることが近年のさまざまな研究により明らかになってきています。しかし、日本では、現在までこのことについての公的な人口統計調査はおこなわれていません。

「性に関わることであるがゆえに学問的で正確な調査が大変難しい。しかし世界各国でおこなわれて

用語集

Lesbian(レスビアン)
女性の同性愛者のこと。

Gay(ゲイ)
男性の同性愛者のこと。英語圏では女性の同性愛者を含むこともある。

Bisexual(バイセクシュアル)
性的指向が同性・異性、両方に向いていること。

Transgender(トランスジェンダー)
医学的な概念ではとらえきれない性別違和をもつ当事者の実態を、性同一性障害も含めて広く表現する言葉。

Asexual(アセクシュアル)
性的な欲求を持たない人のこと。

Intersexual(インターセクシュアル)
先天的に生物学上定義される男性的特徴と女性的特徴の中間的特徴をもつ人々。「間性」「半陰陽」といった言葉で知られている。

性的指向
性的対象が、同性であるのか、異性であるのか、あるいは両方であるのかという意味で用いられる。意識的な選択に基づくものではないという意味を含め、「嗜好」や「志向」ではなく、「指向」が用いられる。

同性愛
性的指向が同性に向いていること。

異性愛
性的指向が異性に向いていること。

性同一性障害(GID Gender identity disorder)
医学的な診断名で、出生と反対の性に対する同一感と、出生上の性に対する持続的な不快感(または、その性役割についての不適切感)をもち、かつ、それによって精神的な苦痛や生活上の問題を抱えている状態とされる。同性愛と混同されがちだが異なる概念であり、性同一性障害をもつ人の性的指向(異性愛であるか、同性愛であるか)は人によって異なる。

ジェンダー・アイデンティティ(Gender identity)
性別の自己意識。多くの場合、「男であるか、女であるか」のどちらかだが、「どちらでもない」あるいは「どちらでもある」という場合もある。性自認や性同一性とも訳される。性同一性障害を持つ人は、性自認が、出生時に割り振られた性別と一致しないために、性別への違和感や、苦痛、困難を抱えることになる。

東京プライド「資料:用語集」より(抜粋)

いる複数の調査からは、どのような社会にも性的少数者は必ず存在しており、その数は全人口のおおよそ3～5%であることがわかっています」(砂川さん)。

性的少数者(それぞれの頭文字をとって“LGBT”とも称される。左ページ用語集参照)と一口に言っても実際にはさまざまな人たちがそこに含まれており、かかえている問題もそれぞれ異質なことも多いといわれます。しかし性的少数者全体に共通している問題もいくつかあります。たとえば、肉親にさえその生きづらさを理解されにくいこと。すべての性的少数者は、多数者である異性愛者の両親から生まれます。そのため両親にさえ自分のことを話せず、本来、居場所であるはずの家庭の中でさえ孤立してしまうことがあります。また、テレビ等での色物的扱いから日常的なからかいの対象となることが多く、こういったことはいじめの問題に直結しています。

人口比から単純計算すると、性的少数者の児童・生徒は40人学級1クラスに1～2人は存在していることになります。しかし、性的少数者の存在が想定されずに教育がおこなわれるため、性的少数者は幼いころから自尊感情を育みにくいといえます。さらに、社会に出た後は、何らかの公的な手続きをするたびに常に性別の申告を求められたり、異性同士のカップルでなければ社会的保障が受けられないなどの問題もあります。

「先進国では、性的少数者の心の健康状態に関しての調査が盛んにおこなわれており、性的少数者ではない人に比べ自殺率が数倍高いといった深刻な状況が明らかになっています。日本でも同様な数字が明らかになりつつあります。

暴力を伴う激しい差別事象は全く無いわけではな



性的少数者のシンボルであるレインボー・フラッグを手に行進。知らない者同士でも思わず手を振り合ってしまう。

いにしても、諸外国に比べればとても少ない。日本での性的少数者に対する差別は、より気づきにくい“社会的排除”なんです」(砂川さん)。

“ゆるやかなつながり”をもとめて

マスコミを通じて流される“オネエ・キャラ”などの典型的なイメージとは異なり、多くの場合、実際の性的少数者は見た目でそれとはわかりません。例えば東京都の人口はおおよそ1,000万人であるので、単純計算すると都内には30～50万人の性的少数者が住んでいることになります。それにもかかわらず社会の中で目に見えない存在であるのは、差別を恐れて本人達がなかなか名乗りをあげられないことが理由の一つです。そのことがさらに差別を助長するという悪循環を招いており、こうしたことから、パレードには、性的少数者の存在を可視化して問題を社会にアピールするとともに、当事者を元気づけ、エンパワメントするといった二つの目的があるのだといいます。

「性的少数者というと不幸なイメージを思い浮かべるかもしれませんが、けっしてそうではない、と。確かに差別があって大変ではあるのだけど、その一方で、人生を楽しんでもいるんだよ!ということを伝えたいんです」(砂川さん)。

実際、パレードはとても楽しい雰囲気の中でおこなわれます。祝祭的な空間は人の心を大らかにするものですが、パレードを歩く人たちと沿道から見物する人たちとの間に小さな交流が生まれるのがそこかしこに見られました。知らない者同士が手を振り合う、ゆるやかなつながりのようなもの、そういう“あたたかさ”が時代的にも求められているように感じられます。

「例年と違ったのは、ボランティアにも狭義の“当事者”ではない人たちがかなりたくさん参加してくれたことです」(砂川さん)。

これも性的少数者に対する理解が徐々に広がっていることのあらわれなのかもしれません。

東京プライドの広報誌「In-Q」

無料配布しています。問い合わせは下記まで。

TOKYO Pride 事務局

〒160-0017

東京都新宿区左門町20-7 左門町ハイツ72

TEL:03-5919-1477

FAX:03-5919-1488

<http://www.tokyo-pride.org/>



レターTalk



多言語絵本の会
「RAINBOW」の
みなさん

TOKYO人権

絵本がつなぐ、地域の中の多文化共生 ——多言語絵本の読み聞かせ

多言語絵本の会「RAINBOW」では、地域で暮らす外国人女性が語り手となり、様々な言語で書かれた絵本の読み聞かせをおこなっています。日本の子どもたちとの交流を通して、外国人と地域の橋渡し役を目指すRAINBOWの活動について、お話をうかがいました。

日本で暮らすアジア・アフリカ圏の親は、同じ日本在住の欧米系の親にくらべて、自分の国の言葉を子どもに教えない傾向があります。「どうして?」と聞くと、たいいてい「わたしの国の言葉は、日本では必要ない。子どもたちは、日本語さえ話せばいいんです」と答えるのです。

けれども、日本語だけでなく、日本の文化まで教えている親はとても少ないし、だからといって母国の文化を伝えていくわけでもない。すると、子どもは大きくなったときに「自分はいったい、どこの国の人間なんだろう?」と疑問に思ってしまうんですね。そんな不幸なことにならないためにも、家庭を持つ外国籍の女性たちが、次の世代にしっかりと自分の国の言葉や文化を伝えられるよう、母国語で情報発信できるような場を作ってあげたいと感じていました。

そこでわたしたちは、2006年2月から目黒区の図書館のおはなし会で、区内に住む外国籍の女性たちと、日本語とともにいろんな言語を使って、日本の子どもたちに絵本を読み聞かせる活動を始めました。

現在は目黒区とタイアップして区内の小学校でも活動しています。読み聞かせはもちろん、その国についてのクイズをしたり、生活習慣の違いなどを読み手の人に語ってもらったりもします。違う国の人と直接触れ合えることは子どもたちにはとても大切なことです。今後は少人数の複数グループで、というスタイルにしていこうと考えています。

多様な言語や文化に触れることで、子どもたちからどんな質問が出てくるんですよ! 彼らの素直さや好奇心には驚かされます。「世界には英語以外にもこんなにたくさんの言葉があるんだ」とか「いろんな言葉や文化をもった人が、わたしたちと同じように地域で生活しているんだ」ということを直接、心に感じてほしいと思っています。

外国籍の女性のなかには、日本に来てから日が浅く、日本語に自信がないため、なんとなく引きこもりがちな生活を送っている人もいます。そんな人に語り手として参加してもらえれば、地域に溶け込むきっかけができるんじゃないかと思います。

きっかけ作りのお手伝いという意味で、わたしたちはこの事業を「となりのおばちゃん的活動」と呼んでいます(笑)。となりに引越



してきた人にすごく関心があるけれど、遠慮なしにズカズカと入り込むわけにはいかない、でもほっとけない…。だから、ちょうどいいお付き合いができればいいな、という発想です。

これまでに、外国人を支援するボランティア活動は全国にたくさんありました。ですが、そこでは日本人が「先生」になって外国籍の方々に日本のことを、「教えてあげるわよ」という感覚になってしまうことが多いようです。ともすれば「いかに上手に教えられるか」ということに関心が向いてしまうこともあると聞きました。

一方、わたしたちが目指す「となりのおばちゃん」の目的は、外国籍の人々に地域との接点を見つけてもらい、積極的に表へ出て行ってもらうことにあります。地域の中で肩ひじ張らないお付き合いをし、彼らの力を借りて地域を見つめ直すことができれば、もっと世の中は変わっていくでしょう。

そのためにも、わたしたちは今後もうまく距離感を保ちつつ、上手におせっかいを焼いていくつもりです(笑)。

問い合わせ先

多言語絵本の会 RAINBOW

TEL: 090-9973-8260

メール: crayonsnihongo@yahoo.co.jp



財団法人東京都人権啓発センター

〒111-0023 東京都台東区橋場一丁目1番6号 東京都人権プラザ内
TEL.03-3876-5372 FAX.03-3874-8346 <http://www.tokyo-jinken.or.jp/>

「TOKYO人権」は都内図書館、区市町村窓口などに配布しています。

「TOKYO人権」ご希望の方へ

「TOKYO人権」は年4回発行しています。ご希望の方は、普及情報課までご連絡ください。